

「みつめる」～未来～

義務教育課長 太田 静夫

新春。「春」という文字に新しい年を迎える喜びと期待を感じます。子どもをみつめ、学びの本質をみつめ、子どもにかかわる自分をみつめてスタートしてから9ヶ月。これまでの実践を振り返るとともに、これからの方向を見定めていく時期となりました。

「今、職人の道に向けて、まっしぐらです。」

中学校の教師であるI先生の元に、教え子のN子から賀状が届きました。

N子は幼い頃からもの作りが好きでした。いつの頃からか、「飾り職人」の仕事にあこがれを抱き、希望を持って工業高校に進学しました。

授業が始まると、細部の仕上げにも手を抜くことなく取り組むN子は、重い機材の扱いにも時間がかかり、作業が遅れがちになりました。中学時代には明るく活発であったN子でしたが、校内に相敵する相手も見つからず、自信を失いかげ、暗い表情で「学校をやめたい」とI先生に相談に来たこともありました。

金属加工の実習でのことです。N子は手間を惜しまず複雑な模様を仕上げましたが、決められた提出期限に間に合わせることができませんでした。遅れをとがめられるものと覚悟して提出に行くと、先生は作品を手にとってじっくり見ながら「とても丁寧に作業をしたね。使う人の気持ちになって作られている。」と認めてくれたと言います。

賀状には、「私は作業が人より遅いです。だけど、丁寧にものを作ることは私の取り柄です。あきらめないで続けていきます。」と結ばれていました。

私たちは、子どもが夢を持ち、自ら未来を切りひらいていってほしいと願います。しかし、日々の生活の中で、やりたいことが見えずにすべてが無意味に思えたり、壁にぶつかって自信を失ったり、時には失敗を恐れて現実逃避の行動をとったりすることもあります。そのような時、教師が子どもに掛ける一言は、子どもの未来を左右するほどの重みを持つこともあるのです。

子どもの表れには、多様な意味が含まれています。一見、負に見える表れの中にも、視点を変えると、その子の持ち味として価値あるものと認められることもあります。



私は、教師がその価値を見いだし、子どもに気づかせていくことが、子どもの未来を「みつめる」ことになるのではないかと考えます。そして、その価値を教師同士が共有することによって、子どもはさらに自分のよさを自覚し、自信を持って前に進もうとするのだと思います。

欠点を補おうとする指導のみから、子どものやる気を生み出すのは難しいものです。また、単に褒め言葉を並べるだけでは、子どもがよりよい自分を目指そうとする気持ちをはぐくむことはできません。子どもの成長を心から願い、琴線に触れる教師のかかわりがあってこそ、子どもは自分を肯定的にとらえ、自ら未来をひらくこうとする力を発揮できるのではないのでしょうか。

私のライバル／それは五秒後の私
マラソン大会でいつも一歩前にいる私
悲しくても広い空を見上げている私
夢を叶えようと一歩踏み出した私

私より少しだけ強く輝いている私
私は追いかける／一生のライバル

(「五秒後の私」 児童作品
未来をひらく子供－子供歌集Ⅱ－より)

教師が子どもの未来をみつめることで、子どもは自分の未来をみつめて歩み始めます。

学びの本質と教育の営みを「みつめる」

— 平成17年度「学校教育の改善・充実に関する調査」結果から —

県内の学校における教育活動の状況を把握するとともに、自校の教育活動を見つめ、さらなる改善・充実に生かすために調査を実施しました。本調査の結果からは、「確かな学力の育成」と「連携」に対する意識の高さが認められ、様々な視点から教育活動を問い直し、吟味している様子が窺えました。

1 授業の質を高める手立てを吟味する

21世紀にふさわしい教育を創造していくために必要なこととして、小・中学校ともに約84%が「確かな学力の育成」を挙げています。そのためには、何と言っても授業の充実が求められます。

(1) 個に応じた指導方法の工夫・改善

個に応じた指導方法の工夫・改善のために、特に重点を置いている項目として、「問題解決的な学習を重視した単元の構造」が4.7%、「体験的な活動や作業的な学習の設定」が4.5%、昨年度に比べて増加し、実感を持って身に付けることができるように工夫をしている様子が窺えました。

一方で、「評価の工夫」が昨年度に比べて9.8%減少しました。子どもの学びをしっかりと見取ることにより、個の指導に生かすことが大切です。

(2) 少人数指導による成果

少人数指導の成果として、次のような回答がありました。

【子どもの学習面】

- 「わかる」「できる」という感想を持つ子どもが多くなった。
- 子どもが発表したり活躍したりする機会が増え、学習意欲の向上につながった。

【教師の指導面】

- 一人一人の子どものニーズにあった指導ができるようになった。
- 教師間の連携により指導力の向上や教材研究の深化が図られた。

少人数指導とは、単に学習集団を小規模化することではありません。教師が一人一人の子どもの学びを見ようとしてこそ、少人数の形態が学びの充実に生かされていきます。中には「授業の打ち合わせが、そのまま教師間の授業研修の場になった。」といった成果も寄せられ、授業の質を高めることにつながっていることが窺えました。

(3) 校内研修の充実

各学校では、「外部から講師を招いて研修」(昨年度比 7.8%増)をしたり、「ビデオ等を活用」(昨年度比 4.2%増)したりして、研修の充実を図っています。

K小学校では、「学舎づくり」を学校経営の柱に据え、教師一人一人が「自己授業改善プラン」を

作成して研修の充実を図り、子どもの学びの充実を目指す取組を始めました。個人研修テーマや研究仮説、教科の年間指導計画、授業改善計画等をA4判1ページにまとめ、その裏面には、年度途中で指導を振り返り、気づいたことや改善策等を書き留めていくようにしました。

教師が課題を意識し、よりよい授業を目指して工夫・改善に努めることが、子どもの学びの充実につながっていきます。



2 連携の在り方を吟味する

今回の調査では、学校と家庭、学校間の「連携」の意識の高まりが随所に見られました。

(1) 学校と家庭との連携

子どもの心の変化をとらえるための工夫として、「保護者との連携を図っている。」と回答した学校が、昨年度と比較して小学校で39.1%増、中学校で29.1%増と飛躍的に伸びました。学校だけで対応するのではなく、家庭との連携を図り、ともに子どもを育てていこうとする姿勢が感じ取れます。

(2) 学校間の連携

研修体制の充実を図るために、異校種間の研修交流をしている学校が全体の71.1%を占め、昨年度から4.9%増加しました。特に、小・中学校間の連携を図っている学校は70.9%で、昨年度から6.7%増加しています。

M中学校区では、幼・小・中学校の教員が年間3回一堂に会し、地区の子どもをどのように育てていったらよいか協議をしています。子どもの実態から3年をスパンとして「伝え合う力の育成」などといったテーマを決め、各校種で具体的な実践を行うのです。こうした取組によって、互いの考えを聞き合ったり、自分の考えを発表したりする力が子どもに付いていっています。

本調査の項目別結果については、小・中学校別にまとめ、昨年12月に各学校に送付しました。自校の位置を確認するとともに、意図を明確にした改善・充実を進めていくことを期待しています。

学校に理科の風を送る おもしろ実験特別講座

静岡県では、平成 16～17 年度の 2 年に渡り、夏休みの連続した 3 日間、県内 4 大学—静岡大学・常葉大学・県立大学（H16 年度のみ）・東海大学（H17 年度のみ）—を会場に、小学校の理科担当者を対象とした『おもしろ実験特別講座』を開催しました。

子どもは理科が好き！ ところが・・・

昨年 7 月に文部科学省が発表した小・中学生の意識調査で、「理科が好き」と答えた小学生の割合は国算理科の 4 教科の中で上位でした。しかし、その割合は 4 年 75.1% 5 年 60.2% 6 年 52.9% と、学年を追う毎に下がっています。



理科の楽しさは、探究心が起きてこそ感じることができます。本や話だけでは感動は伝わりません。発見の喜びや、本物の神秘を知れば、難しくても子どもは挑戦していきます。

そのためには、まず、教師が楽しむこと。その上で、子どもの疑問に答える知識を持って欲しい。それが「おもしろ実験特別講座」のねらいです。

理科漬けの 3 日間

大学を会場に、理科の専門家による講義を、学生気分に戻って受講して頂きました。燃えるシャボン玉、モンシロチョウの羽化、トリチュエリの実験、マウスやハマグリ解剖、雲を作る実験…。目の前で展開する様々な変化や現象に、受講者の目が光ります。自然科学の楽しさ、美しさ、神秘等によれ、驚きと感動に満ちた 3 日間でした。



9 月になり授業が始まると、受講者のみなさんは講座の体験を生かし、子どもたちへ多くの「わくわく」や「ドキドキ」を広げてきました。ここにいくつかの事例を紹介します。

ペットボトルを並べて実験コーナーを作る

A 先生は、2 学期が始まるとすぐに、子どもと浮沈子を作りました。水の入ったペットボトルの中に浮かべて蓋をし、壁を押すと、中の浮沈子が浮かんだり沈んだり…。横向きの圧力が上下の動きに変わる現象に、子どもたちは「水には、いろいろ不思議な力があるんだなあ。」と驚いていました。作ったペットボトルを昇降口の机に並べて「実験コーナー」を作りました。通りがかった子どもも手には、**「どうしてかなあ？」**。科学の世界が広がっていきます。

恐竜が活躍した太古の時代に思いを馳せる

F 先生は、6 年生の地学の単元「大地をさぐる」の学習で、子どもが大好きな恐竜の化石を扱うことにしました。化石を含む地層が、過去を知る手がかりになることを伝えたかったからです。講座で体験した、恐竜のミニチュアモデルから実際の重さを推定する「恐竜の重さ調べ」の実験を授業に活用しました。「ステゴザウルスは 7 もあって重いから、しっぽのとげを振り回せば、すごい攻撃だね。」子どもたちは、恐竜が活躍していた太古の時代に思いを馳せます。

もっと調べてみたい

I 先生は、水溶液の性質を調べる学習で、講座で紹介された紫キャベツ液を使いました。酸性からアルカリ性まで、色の変化



が敏感で美しいからです。酢やレモン水が薄いピンク色になり感動する子、虫刺されの薬が緑色になって笑顔を見せる子。「ぼくは体に付けるもの（水溶液）を実験したが、肌に付けるものはほとんど中性というのがわかった。」「もっと調べてみたい。」と子どもの探究心はどんどん膨らんでいきました。

科学っておもしろい！

M 先生は科学クラブに講座で作ったブーメランを取り入れました。「なぜ、ブーメランが戻ってくるのか、不思議でたまりません。科学っておもしろい。」と子どもは夢中です。



もっと、理科大好きな子どもに・・・

本物にふれる楽しさや感動が、確実に子どもたちに広がっています。県では昨年度に続き、「おもしろ実験特別講座事例集」を発行します。参加していない方も手にとって活用して下さい。

子どもの探究心を燃やし続けることができるのは・・・そう、先生方です。

「確かな教育実践」は情熱と継続研究から

—平成17年度静岡県教育研究奨励賞—

静岡県教育研究奨励賞は、創設以来42年目を迎えました。この間、県内教職員の研究意欲と資質向上とともに、本県教育の充実、振興に多大な成果をあげてきました。今日も中核となって活躍している教職員の申請が数多くありました。本年度の特徴としては、「確かな学力」の育成のための個に応じた指導方法の工夫や、教科指導にかかわる研究が多数寄せられました。また、特別支援教育に關した幼・小の先進的な取組や魅力ある「総合的な学習の時間」の取組、学びの充実感に満ちた学級経営・教育課程に関する研究についても、数年間を費やした継続研究、様々な角度から追究した研究実践が数多く見られました。

1 申請件数と優秀賞、優良賞の授与件数

	幼稚園	小学校	中学校	高等学校	養護教育
申請件数	23	172	70	13	30
優秀賞件数	1	6	3	1	2
優良賞件数	7	56	23	5	8
授与件数計	8	62	26	6	10

2 優秀賞受賞者（幼・小・中・保 養護教育部門入賞者を含む 11件）

氏名	校名	研究題目
宮澤 幸江 栗山 直代 鈴木 久々 太田久美子	浜松市立中瀬幼稚園	「自分を大切にし、他の人も大切にできる子」を育てる
小山 志保	御殿場市立玉穂小学校	学びの充実感を味わいながら伸びる児童のあり方について
加藤 友子 山下 裕子 大石 恒雄 新村 弘道	焼津市立焼津南小学校	人・もの・こととのつながり合いを通して、自己の生き方を学ぶ子どもタイム
吉川 利行	浜松市立尾森小学校	楽しみへの追求活動を通して児童すること喜びを感じる読書活動の推進を目指して
久保田文康	磐田市立大塚小学校	「算数を学ぶ楽しさを感じる授業」の創造
藤子千加子	袋井市立袋井北小学校	一人一人の発達を大切に学ぶ子どもづくり
牧野 王敏	袋井市立袋井北小学校	子供たち一人一人が、喜んで学習し、力がつく授業を目指して
長田 裕次	御殿場市立御殿場中学校	特別活動を開くにした、出来る方を育む様々な手段・手段づくりを目指して
矢澤 和宏	焼津市立焼津中学校	「豊かな学び」を生み出す「読書・交流読書」
山本 敏	浜松市立佐久間中学校	「総合的な学習の時間」の充実のための、展開活動としてのマナー・マナー
平井嘉英代	浜松市立中瀬小学校	「保護者の手で、自分らしさを伸ばしていく子」の育成を目指して



3 優良賞受賞者（幼・小・中・保 養護教育部門入賞者を含む 8件）

(1) 幼稚園（7件）

氏名	校名	氏名	校名
浅田 幸子	伊豆市立月ヶ瀬幼稚園	安岡 千直	袋井市立浅羽西幼稚園
清水 裕子	掛川市立千浜幼稚園	山本恵理子	袋井市立浅羽北幼稚園
古田八重子	浜松市立下阿多古幼稚園	小林 文	
山本 啓子	浜松市立北浜東幼稚園	森田 奈穂	
榎澤 一恵	磐田市立三南幼稚園	神谷 文代	



(2) 小学校（58件 養護教育部門入賞者2件、グループ入賞者中学校2名を含む）

氏名	校名	氏名	校名	氏名	校名	氏名	校名
殿岡 史寿	浜松市立第一小学校	高橋 由巳	島田市立島田第四小学校	近田由紀子	浜松市立大塚小学校	岡本 正彦	磐田市立向笠小学校
渡邊 高次	三島市立南小学校	牧田 年史	焼津市立和田小学校	塩崎 順子	浜松市立第一小学校	宮崎 弘悦	磐田市立福田小学校
井山由美子	富士宮市立大宮小学校	栗本利江子	焼津市立焼津南小学校	星立 昌美	浜松市立森名小学校	伊口 佳子	磐田市立福田小学校
百瀬 寛造	御殿場市立高瀬小学校	堀田 順子		大宮 久人	浜松市立森名小学校	関口 純	磐田市立福田小学校
佐藤さよ恵	御殿場市立御殿場南小学校	安岡 寿子	掛川市立第一小学校	山柳 高明	浜松市立北浜小学校	岡本 春里	磐田市立豊田西小学校
望月 崇宏	磐田市立御山小学校	岡本 佳子	掛川市立西山口小学校	戸塚実枝子	浜松市立幸佐小学校	宮崎 知子	磐田市立豊田西小学校
太田 正洋	伊豆市立修善寺南小学校	松本 良子	掛川市立西山口小学校	宮下 元美	浜松市立新原小学校	川合 幸江	磐田市立豊田北小学校
森本 美歌	南伊豆市立三喜小学校	高合 裕子	掛川市立日坂小学校	中村 節子	浜松市立内野小学校	島崎 弘昭	磐田市立豊田西小学校
佐藤 隆幸	南伊豆市立東小学校	堀内 智子	掛川市立上内田小学校	小島 恵子	浜松市立北浜西小学校	増井利司大	磐田市立豊田西小学校
大島 正弘	清水市立清水小学校	高合 正幸	掛川市立南中学校	谷 航	浜松市立鶴山第一小学校	前田 寛子	磐田市立豊田西小学校
鈴木 弘美	小山町立須走小学校	鈴木 英子	掛川市立栗川中学校	森崎久美子	浜松市立水窪小学校	神谷 祥平	磐田市立豊田西小学校
石原 一則		中村 成宏	御殿場市立白羽小学校	飯田 貴子	浜松市立石川崎小学校	齊藤 真	磐田市立三川小学校
松下 康子	島田市立島田第二小学校	堀田 高弘	御殿場市立第一小学校	池田 裕枝	浜松市立中川小学校	小沼 公子	磐田市立浅羽南小学校
鈴木 孝孝	島田市立六合東小学校	池田 健	磐田市立六郷小学校	久保 賢治	浜松市立中川小学校	兼子 聖門	磐田市立浅羽東小学校
松本 昌子	島田市立伊太小学校	内藤 敬江	磐田市立阿部小学校	野末しのぶ	浜松市立金指小学校	石田 敏子	磐田市立阿部小学校
秋山千江子	島田市立初倉小学校	小橋神敏法	牧之原市立高岡小学校	加藤 洋美	浜松市立伊平小学校	鈴木 敏郎	磐田市立高岡小学校
多々良裕子		橋本由美子	牧之原市立片浜小学校	石原 久美	浜松市立三ヶ日南小学校	吉田 玲乃	磐田市立高岡小学校
大野有紀子	島田市立島田第五小学校	松本 裕樹	川根町立豊岡小学校	鈴木 敬代	磐田市立磐田中継小学校		

(3) 中学校（23件）

氏名	校名	氏名	校名	氏名	校名	氏名	校名
杉山 健	沼津市立長井南中学校	原田 功	浜松市立南郷中学校	藤田 知子	浜松市立津江中学校	大津 幸子	磐田市立豊田南中学校
杉山 伊織	磐田市立小瀬中学校	野中 啓之	浜松市立森名中学校	山崎佐知子	磐田市立磐田第一中学校	北條 真	磐田市立豊田南中学校
土屋 弘子	三島市立北中学校	森田 洋子	浜松市立北浜中学校	三浦 孝枝	磐田市立城山中学校	倉島 茂見	磐田市立浅羽中学校
松岡 智子	御殿場市立東原中学校	澤木 重利	浜松市立北浜西中学校	鈴木 絹枝	磐田市立豊田中学校	西島 正	磐田市立高岡中学校
柴田 慈明	掛川市立大須賀中学校	竹村 久生	浜松市立佐久間中学校	青島 誠一	磐田市立豊田中学校	西川いづみ	磐田市立高岡中学校
堀松 寛	藤原町立藤原中学校	井山 昭博	浜松市立津江中学校	伊藤 希子	磐田市立南南中学校		

大学院派遣

学校教育に関する理論的・実践的な研究を進め、専門職としての資質能力を高めるために、毎年、24人から27人の教員を大学院（兵庫・鳴門・上越の各教育大学大学院及び、静岡大学大学院）に派遣し、本県教育の向上を図っています。

2年間の派遣を修了した教員は、学校や地区の中核となって、研究の成果に基づいた教育活動を推進しています。今回、その中からお二人の実践をお知らせします。

フィールドワークの案内役

沼津市立第五中学校 山口 恭介

大学院では、自然系（理科）を専攻し、「沼津市周辺の地質と地域教材の開発」をテーマとして取り組みました。身近な山の地質を教材化し、「地層を観察しよう」「火成岩はどこからきたの？」等、理科への興味・関心を活かした授業を構想しました。

研究成果の活用として、沼津市内夏季研修会理科部のフィールドワークで、市内の教員へ情報発信の機会を持つことができました。

市内南東部にある鷲頭山、大平山の地質調査に、案内役を務めたのです。ここは、大学院の時、自分がテーマとして調査した場所です。



フィールドワーク

では、身近な地質を知ってもらうとともに、地域教材を授業の中で活かしていけるコースを設定しました。この地域は、地球のダイナミックな動きを感じることができる、貴重な教材となるものがたくさんあります。凝灰岩中に幅30cmほどでマグマが垂直に突き抜けた直跡（貫入岩）も見られ、参加者から驚きの声がありました。また、貫入岩の中の見事に成長した石英の結晶に感動する姿もありました。

この地域に広く分布する凝灰岩は岩石をつくっている鉱物の観察にとっても適していることもわかりました。私自身も、早速選択理科の授業に取り入れ、生徒と観察しました。生徒は、石英、長石、輝石、磁鉄鉱などを簡単に見つけることができ、夢中で鉱物探しをします。A君は「宝石のようだ」とつぶやきながら、双眼顕微鏡に見入っていました。



フィールドワーク参加者が、少しでも多くこの地域の自然を教材として利用したり、身近なところにある素材を教材としてとらえ直したりしてくれるよう、これからも働きかけていきたいと考えています。

子どもを見つめる視点を広げる

焼津市立焼津南小学校 新村 弘道

大学院では、教育心理学を専攻しました。心理学の研究を進める上で最も広く用いられている質問紙法について、様々なプロセスを経て作成される質問紙の有効な活用方法等を学び、テーマを「少人数指導期間における児童の学習目標志向と教師の評価との関連」として研究を進めました。

2年目には、小学校の4年生以上の9クラスに協力を得て、「学校満足度尺度」を用い授業を再検討しました。その結果を「①教師がとらえる子どもの学習意欲②発達年齢による違い③習熟度別における教師の評価④担当する教師の影響」の4点から分析しました。

そこから、少人数指導の編成について主に次のようなことに配慮が必要なのことがわかりました。

- ・学級担任が受け持つことを計画的に取り入れる。
- ・グループを長期間限定しない。
- ・指導者が願う子どもの姿を共通理解する。
- ・競い合いを好む子どもは学習意欲があるととらえがちな傾向があることを認識する。

教師として、子どもの姿から学習意欲やつまずきなどを読み取っているのですが、より客観的にとらえることができれば、子どもの学びを支えるための方向性を考察・検討することができます。



「満足できていない子どもはなぜ満足できていないのか。」「今後どのような手だてをとっていくことが大切か。」などの視点から、子どもを見つめることは、指導者自身を顧みることにつながります。

今年度、自校の3年生以上で学校満足度調査を行い、大半の子どもが学校生活を肯定的にとらえていることが分りました。「自分は怒ってばかりいたけれど、意外に子どもたちの満足度が高かった」という感想もありました。どの子どもが学級集団にどのように影響しているかを把握し、指導方法やかかわり方を工夫することが、満足度を高めていきます。

今後、生徒指導主任、特別支援コーディネーターの立場から提案できることを考えていきたいと思っています。

「共生福祉科」のカリキュラムを提案

教育研究開発学校とは、教育課程の改善に資するため、学習指導要領等、現行の教育課程の基準によらない特例を認められて、研究を委嘱された学校です。県内では、磐田市立豊田南中学校が平成15年度から3年間の指定を受け、『共生福祉科』という教科を新設し、カリキュラム開発に取り組みました。

11月10日には研究発表会を行い、研究で集めてきた新カリキュラムの概要と成果を発表しました。

学校文化の発信

磐田市立豊田南中学校

本校では、現行学習指導要領によらない新しいカリキュラムを、これからの時代を見据えて、子どもの側に立って提案させて頂きました。『共生福祉科』の研究開発は、今やっと入り口に立ったところですが、これからの時代に大切な分野として、こころざしを高く持って取り組んできました。

『共生福祉科』は、「私と私をとりまく人たち」「高齢者福祉」「青少年福祉」「障害者福祉」「共生福祉演習」の5つの単元で構成しています。いろいろな人たちとの双方向の交流を軸にして、実体験を伴った人間としての学びを目指してきました。



ある3年生がこれまでの学びを振り返って、次のように語っています。

私たちが学んだことは、ボランティア精神や困っている人を助けるということだけでなく、自分の意見を言い、人の意見を受け止める中で、よりよいものを生み出していこうとする姿勢、みんなが幸せでいるために相手の立場に立ち、自分にできることは何かを考えていこうとする態度、そして実行力です。日本中の中学生の中で一番福祉について問題点も含めて知っているのは南中生だと思います。私たちが社会に出たときに一人一人が何か一つでも意見を出し、行動ができたと思います。

私たち教師の思いも同じです。

本校の教育目標にある「共に生きる心豊かな生徒になって、21世紀の社会を背負ってもらいたい」という願いや思いが、『共生福祉科』に繋がりました。

研究開発を通して訴えたかったことは、学校が主体性をもって発信していくことの大切さです。地域に根ざした学校文化をみんなで創り、互いに発信していきましょう。

本年度から、旅費制度が改正されましたが、その内容について、具体的に教えてください。

Q 居住地発着はどのような場合に認められますか。

A 教職員の旅行については、原則として勤務校を発着地として旅行命令をしています。しかし、公務上の必要や旅行の職務内容、経路や時間、経費等に照らし、勤務校を出発地（帰着地）とすることが時間的、経済的に合理的でない場合には、教職員の居住地を出発地（帰着地）とする旅行を命ずることができます。

対象となる旅行としては、

- ・通常に出勤し、勤務時間に出発したのでは、用務の開始時刻に間に合わない場合
- ・用務終了後、勤務校に勤務時間内に帰校できない場合

などが挙げられますが、時間的要件だけでなく、経済性、必要性等を個々の事例に応じて総合的に判断し、決めることになります。

ただし、居住地発着の居住地とは、旅行者の居住地をいいます。したがって、「単身赴任者の家族の居住地」、「友人、知人の家」、「実家」、「親戚の家」については、居住地になりません。

Q 勤務校を発着地とする旅行命令により出張しましたが、出張用件終了後、勤務時間終了まで年休を取得する必要が生じました。そこで、電話にて年休申請を行い、年休行使後に居住地に帰着しました。この場合は、発着地については、どのように扱えばよいのですか。

A 用務が早く終了した場合は、帰校することになります。しかし、やむを得ず年休を取得する必要が生じた場合は、旅費額を総合的に考え合わせ、居住地発着が妥当であるかどうかを校長が判断することになります。

なお、出張用件が延び、電話による承認も受けられず、自己判断で居住地着とした場合など、様々な事例が考えられますので、事例ごとに校長が適正な判断をすることが必要になります。

今後、各学校においては、新たな旅費制度を正しく理解し、適正な事務処理が行われるように、配慮していただきたいと思います。



発行/静岡県教育委員会義務教育課
TEL 054-221-3140

